

今野義孝先生のご退職にあたって

人間科学部長 益田 勉

2018年3月をもって人間科学部臨床心理学科の今野義孝教授が退職されます。今野教授は、1979年4月に本学教育学部に赴任され、以来39年間の長きにわたって本学において教育研究にご尽力されました。2002年4月には教育学部から人間科学部に異動され、本学部でも16年間にわたってご活躍いただきました。本当に長い間、お疲れ様でございました。

今野教授は筑波大学における博士学位論文『動作的アプローチによる発達障害児のセルフコントロールに関する研究—自閉症と注意欠陥障害をめぐって—』以来、一貫して障害者（児）支援を専門とされてきました。しかし、このご専門を志すにあたっては、今となつては天の配剤ともいふべき、偶然のきっかけがあったとお聞きしています。今野先生は、もともと国文学を志望されていました。先生が、山形大学の文理学部国文学科で鴨長明の研究をされていた大学3年の時に、たまたま精神科の病院の夜勤のアルバイトをする機会があったそうです。そこで、それまで想像すらしたことのない精神科の患者さんとの出会い、病に苦しむ人々を目の当たりにして「こういう人たちのために何かできないか」と強く思われたそうです。そこで同大学の教育学部養護学校教員養成課程に学士入学され、さらに東京教育大学大学院（現筑波大学）に進学されることになりました。1979年に筑波大学から文教大学に移籍されましたが、それは恩師からの電話一本の指示によるもので、「文教大学に特殊教育課程を作ったが専門教員がないので、君行ってくれ」ということだったそうです。以後、障害者支援の現場にずっと身を置きながら、教育研究の仕事を続けられてきたこととなります。業績の目録を拝見しますと、著書50点あまり、論文140点あまり、学会発表280件あまりと、実に膨大な数に上りますが、いずれも障害を持つ人たちへの役立ちを第一に考えた研究成果と拝察いたします。年平均10本以上にもなる論文や研究発表をどのように組み立てられるのかとお聞きすると、1冊の研究ノートを出してこれ、直近から5年、10年くらい先までの発表計画をこのノートに書いてあるのですと教えてくださいました。

今野先生は、主に臨床動作法（動作法）に関する研究と実践を重ねられてきました。特にご自身の創案になるもので1991年に発表された「とけあい動作法」は、多くの臨床効果を生み出してきました。一般の動作法においては援助者が主体で、場合によってはクライアントに苦痛をもたらすこともあるのに対して、とけあい動作法は、共有体験を重視する立場から考案された方法です。当初は学界の定説を否定するものとして各方面から批判や反感が寄せられたといえます。とけあい動作法について、先生は著書の中で次のように解説されています。「とけあい動作法の支援のねらいは、心と身体をつなぐの体験を通して、他者や外界との間に安心・安全の関係を築くことにあります。心と身体をつなぐのを阻害する要因には、過敏で傷つきやすい心身の特徴に加えて、不安やストレスによる緊張などがあります。

とけあい動作法では、子どもの身体に現れている緊張や不安を支援者の掌でやさしく包み込みながら緩めることによって、心と身体がゆったりとした心地よい体験のもとでつながるように支援します」。

今野先生は多くの学会に所属し、評議員、理事等として学界に貢献されてきました。学会の大会長としての実績も多く、日本イメージ心理学会（2001年）、日本自閉症スペクトラム学会（2003年）、日本家族心理学会（2005年）、日本カウンセリング学会（2010年）等の大会長を歴任されてきました。また、社会的活動にも積極的に取り組まれ、埼玉県臨床心理士会会長（1993年6月～1995年5月、2002年6月～2011年5月）、社団法人埼玉犯罪被害者援助センター理事長（2004年4月～2008年4月）、埼玉県就学支援委員会委員長（1998年4月～2008年3月）などとしても活躍されてきました。本学の新キャンパスが予定されている足立区との研究交流事業にも長年にわたって取り組んでこられました。これは、足立区教育委員会が指定する小学校において、文教大学の臨床心理学専攻の大学院生または人間科学部、特別教育専攻の大学生を研究生として受け入れ、特別な支援を必要とする児童を対象に、週1日程度の頻度で研究交流を行うとともに、大学の指導教員が学校を訪問し、その指導・方法について、研究生および担任・校内委員会に対して助言をするというもので、2006年から11年間にわたって継続し、一貫して今野先生が指導教員になっていただいています。2003年以来、文教大学臨床相談研究所長や大学院人間科学研究科臨床心理学専攻長を何期かにわたってご担当いただいたのち、2009年度から2010年度にかけて大学院人間科学研究科長を務められました。直近の学部内の校務分担としては、教育学部におけるご経験の長さから、キャンパス教育実習委員、教職実践演習小委員会委員、全学教員養成課程運営委員などをご担当いただいています。教員養成課程の再課程認定が進もうとする中で、学部内では余人をもって代えがたい担務をお願いしているところです。

最後に今後の抱負をお聞きしたところ、今野先生はあのいつもの満面の笑みを浮かべながら、「実は去年、自宅近くに3階建ての住宅を購入して『今野心理臨床研究所』というのを作ったんです。」と切り出されました。発達障害の子どもを抱えて疲弊している親御さんたちをたくさん見てきた経験から、地域の人たちを対象にした支援活動をする場所にしたいとのことでした。そこでは、土曜日開講のシニア研究会という勉強会ももう始まっているそうです。この研究所の活動は無償ボランティアとして行うつもりで、心理臨床に携わっている人たちに対するスーパービジョンなどを行う場としても考えたいとお話でした。本学ご退職後もますますお忙しくなりそうです。一方で、今野先生の最近著の著者紹介には主な趣味として、「神社や古い寺の散策、野仏の鑑賞」とありました。エネルギッシュな先生にしては意外の思いもありましたが、今後も緩急自在の充実した日々をお過ごしになられるであろうことを確信した次第です。

今野先生、本当に長い間、お疲れ様でございました。私ども後進のために今後もいろいろ教えてください。よろしく願いいたします。